

# 圖 版 解 說

## 一三、彌勒來迎圖

東京美術學校藏

掛幅 絹本着彩 竪九三糎 横四六・五糎

(正木篤三「彌勒來迎圖考」參照)

## 四、五、淨土五祖繪傳

神奈川縣 光明寺藏

卷子裝 紙本着彩 竪三三糎 横九一四・五糎

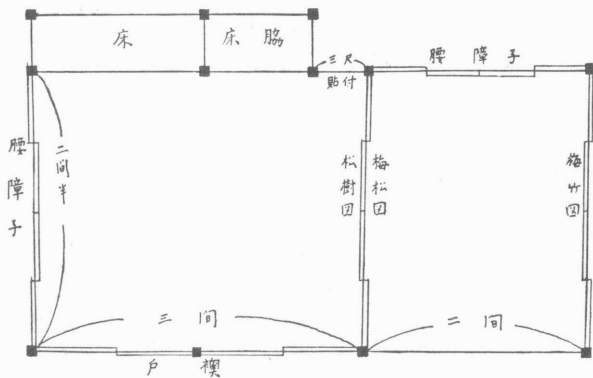
(田中喜作「淨土五祖繪傳」參照)

## 六、七、海北友松筆 松竹梅圖

京都 禪居庵藏

襖張付 紙本墨畫 各面 竪一三七糎 横一一七・五糎

桃山時代の繪畫はその時代精神とも云ふべき、新興武家社會の豪壯な趣味感情の下に、着想雄大にして絢爛目を奪ふ金碧濃繪の裝飾的畫風が城廓や宏大な邸宅の築造に伴うて、すばらしく發達したのであるが、また同時に一方に於て、その眩耀華美な時代文化には一見相容れられぬかの如き、蕭散枯淡な畫風をもつ水墨畫が存在して居つたのである。言はゞその様式上、一は當代の豪壯なる構造建築の裝飾に應用せられ、勢ひ客觀的に綜合統一されて、自ら華麗な色彩を悦ぶ傾向をもつに反して、他は専ら前代の閑寂な禪的好尚を承け、主觀的な情趣に基きて、茶室建築や是れに伴ふ造園趣味と同じく、枯淡な嗜好に投ずる傾向を有するものであつた。是れは唯に當代の繪畫藝術の範圍に限らず、何れの時代、何れの方面に於いても、人間の感情生活の裡に常に發見せらるゝ明暗表裏の二つの姿相の表はれとしてみるべく、偶、當代に於ては、時代精神に迎合せる前者の傾向がその表面を流るゝ主潮となり、後者の傾向がその背面の傍



禪居庵書院見取圖

流となつたのである。但し後者の水墨畫としてその畫調をなすものは、前代足利期の水墨畫に見るが如き靜閑幽寂な範疇に在るものではなくして、やはり桃山期と云ふ豪壯な時代精神と合致すべき、勁健な畫調を有するものであつた。而して當代繪畫の傾向に於て、天正年間を中心として考へれば、前者の畫風を代表せる者は狩野永徳であり、後者の畫風を代表せる者の中に海北友松が居つた。友松にも亦金地賦彩の裝飾畫の遺品が一二ならず現存してゐるが、友松の友松たる特徴を把握するには、やはりその清勁簡老、颯爽たる筆致の鮮やかに表現されてある水墨畫に俟つべきであらう。茲に掲載せる京都建仁寺の塔頭、禪居庵の襖繪の如き、その水墨畫の代表的遺品の一つとして擧ぐべきものと思ふ。

禪居庵の現在の書院は上圖の如く横三間縦二間半と横二間縦二間半との二室より成り、兩室を劃して二間半四枚の襖を立て、その襖の表裏のうち大室に面して松樹の圖(圖版六)、小室面に梅松圖(圖版七(2))が畫かれ、また小室にはその襖と相對する側に同じく二間半四枚の襖あり、前者に正對して梅竹圖(圖版七(1))が描かれ、いづれも素紙に水墨を以て揮寫し、金泥霞引を施してゐる。是等三面の襖繪を通觀するに、圖版六の松樹の枝は左右に伸びて、

一は畫面の端に至り他は畫面の端に於て中絶されてゐる。而して向つて右方の部分は圖版七(2)の左端に描かれてある松の梢に連續して、圖形が完結されてゐる。尙圖版七(2)向つて右方に描出されてある梅樹は、圖版七(1)の向つて左方に描かれたる梅樹と枝幹の圖様、相向背して而も對照的圖形をなしてゐることから考へて、この兩圖様はもと相連續せるものなるべく、是等襖繪全體は或る一室の三方をコの字形に仕切り、圖版七(2)の梅松圖を中央に置き、左側に圖版六の松樹の圖、右側に圖版七(1)の梅竹圖を置いて構圖が相連絡するやうにしつらへてあつたものと推測される。

その畫材としての松竹梅は、由來凡庸なる畫家の筆端にまで描出され、得て俗陋に墮し易いものであるが、その畫因の如何によつては超凡なる畫趣を横溢さすものとなる。即ちこの畫圖に見るが如きその枝幹の輪廓をなせる筆畫と云ひ、その水墨の暗幽な色調と云ひ、自然の錯綜せる外形を可及的に簡約して、端的に形象の裡に秘む實相に觸れんとせる減筆の一種特徴ある表現に依れるは、到底凡手のよくするところではない。而して是れが友松の手になるものであることは、寺傳をまつまでもなく、その描法の特徴より明確に實證され得るのである。友松の標準作として、正銘なる落款を有しその畫蹟の代表的遺品を求むれば、先づ京都妙心寺所藏の三酸寒拾圖、琴棋書畫圖及び牡丹梅花圖各一雙の金地濃彩の屏風を擧ぐべきであらう。而して是れと彼とを比較してみると、是れは僅に金地の霞引をもつのみにて、總て水墨の描法より成り、彼は金地濃彩の描法より成りて、一見異種の手法を思はせるものではあるが、全圖に漲る一種透徹せる畫調は兩者共通の特徴である。猶その圖形の部分的特徴を指摘すれば、彼の琴棋書畫圖の景に描かれてある梅樹と、牡丹梅花圖にある梅樹との濃淡程よき墨描、力強く屈折せる枝幹、律動的に長く伸びたる梢頭など、總て鋭い筆觸を有し、極めて簡約せられたる渴筆の描法もて畫かれてゐるのである。翻つて禪居庵の襖繪の中、圖版七(1)及(2)に描かれてある梅樹を見れば、同じ氣魄、同じ筆觸、同じ描法の表現に接するのである。例へばこの梅樹にこもる畫家の氣魄は或は墨描鮮やかな枝幹となり、或は渴筆の線描の長く伸びたる梢頭となり、力強き點描の梅花となりて、すべて物象を寫すに律動的の減筆の描

法もてなれるものである。また圖版七(1)に描かれてある、竹幹や竹葉の濃淡を附せる墨色の相は、極めて簡素な描法になるものながら、觸れば葉擦れの響さへ感ぜしむるものがある。而して圖版六の松樹の圖は是等三面の襖繪の中、最も特色あるもので、畫面の中央に巨大な樹幹が畫消の手法により極度に簡約され、墨色の相また微妙な變化を示して秀潤を極め、その筆鋒は飽くまで強き力を藏してゐる。かくてまた左右に伸びた枝幹より派生せる梢を作る渴筆は、その針葉とともに刺すが如き鋭い描法をもつてゐる。而してこの樹幹に宿る二羽の鴉鳥の靜止せるさまは、畫面全體をつむ靜寂の相の基點とも見られ、ひいては早曉や薄暮に起る大自然の沈黙の光景さへ聯想されて、着想的に畫面の空間の擴りを深めてゐる。

さて是等の襖繪全體に漲る勁健な氣魄の表出と飽くまで透徹せる畫調は、宋代の梁楷の畫風さへ忍ばるゝもので、彼が描ける人物畫の所謂「袋人物」の描法が梁楷ねらひの一つの表はれとして世に喧傳されて居るけれども、それは嚴密の意味にて梁楷畫の溢るゝ如き自發力と流動性との表出を缺き、表面の形式のみを踏襲せる憾みあるに、是等の畫圖の如き専ら自然寫象のものに於ては、兎も角も梁楷の筆墨の意を汲む友松の眞面目を窺ふに足るものがある。

尙圖版七(2)、梅松圖の一隅に「友松筆」の款記と掠れる文字の不明になつてゐる印の上部が残つてゐるが、その筆蹟に就いては猶檢討の餘地があるものと思はれる。

友松名は紹益、近江の人、慶長二十年六月二日享年八十三歳にて歿したるは、諸書に記載するところである。その傳記に就いては、彼の後裔として京都に現住せる海北氏に傳はり、友松の孫友竹の筆になる友松夫妻の畫像贊(畫像の筆者は嫡子友雪)及海北家由緒記が最も詳かである。たゞ此の古記も友松の歿後凡百年享保九年に記録されたものであるから、直ちに採つて彼の正傳と解することは困難なりとすべきであるが、彼が少時東福寺に入りて、その性畫圖を善くするまゝに、畫法を狩野元信に問はんとした時、元信の言に「箇兒自ら梁楷の妙手あり余何ぞ及ばんや」と嘆稱したと傳へることや後年禪學の修業積みて、大徳寺の春屋宗園より居士の號を授けられ、兼ねて五條袈裟を與へられたと云

ふことまた茶道を古田織部に習うたこと等の事蹟は、其全部を信じ難いまでも執りて以て、彼が畫風の特徴を理解する一助となすに足るものであらう。

(菅沼)

## 八、改琦筆 枇杷圖

神奈川縣 竹添履信氏藏

挂幅 絹本淡彩 竪一三三種 横三八・七種

枇杷一枝、玉果累累として垂るゝ所、一介の鳥蟲だに點せず、而も結構宜しきを得て些かも弛緩の氣を見ない。色彩の主調は地に薄き金泥を敷き、濃淡の墨色の微妙なる變化を基調として果實にあるかなきかの黄色を用ふるのみである。改琦字は伯韞、又一字を白香と云ふ。七蕪と號し又玉壺山人と號した。江蘇省松江縣に僑居し、蒲柳の質にして藥餌に親む事が多かつたが詩畫共に天授の才あり、殊に花卉、士女に工に、乾隆嘉慶の交、名聲一時に高く、都中の人士その片楮を得ては之を瑰寶よりも貴しとし、千金を以てするも尙易ふる事を肯じなかつたとは、墨林今話、墨香居畫識等の傳ふる所である。道光九年卒す、時に年五十六。宜なる夫此一小幀にも一脈寂莫の氣を藏し、ほそくとしてしかも鋭い神經の動きさへ觀取し得らるゝかと思はるゝものは、是一箇多病の才

## 内外彙報

### 財團法人尾張徳川黎明會の設立

侯爵徳川義親氏の寄附になる財團法人尾張徳川黎明會は昭和六年十二月十三日を以て設立された。

子が病閑の餘暇、憂を寫かんが爲に、平生玩賞の金吉金眞本をとり、或は筆を管めて迎夏果垂金と詠じ或は縑を展べて一枝

(原

寸)

詠じ或は縑を展べて一枝

を描き、以て自ら慰めたものでもあらうか。かくの如き畫趣は固より清朝畫家に通有なる一特質であるが、特に相近きものを求むれば南田憚壽平の作品と靈犀相通するものあるを認め得るであらう。因に言ふ金吉金、名は農、字は壽門、冬心と號し康熙、乾隆の間にあつて名一世を蔽ふた鬱乎たる大家である。改琦の名は夙に我國に知られ、その畫蹟の紹介せられたるものも一二あるが、殆んどそは美人畫であつて婦人畫家としての改琦の名は稍もすれば、花卉蘭竹の妙手としての改琦の名を蔽ふの傾があつた。然しながらその描く所の婦女は容姿一律にして甚だ變化に乏しく、勿論仇實父の流を亞いでたゞ様によつて葫蘆を描くに止まつた時流の凡庸畫家に比すれば、妍雅妙絶と稱するも決して過褒ではないが、かの世上に喧傳する所の紅樓夢圖の如きよりも却つて、その眞價はかくの如き一木一草を寫して能く自然の眞に迫るものにあるべく、清朝名家畫錄に所謂「所繪蘭竹筆情超逸不染點塵」とあるもの直ちに借りて以て此畫の評とする事が出来やう。(正木)

舊尾張藩主徳川家は、藩祖義直侯以後多年に互つて傳來された、美術的にも歴史的にも貴重なる什寶美術品又は稀覯の古書籍の多數を所藏されてゐるが、當主義親侯爵は、それ等が個人的に死藏さるべきにあらずとして、豫てより之を活用するの方途を考慮せられつゝあつたが、計畫熟して、什寶器具圖書及び土地建物に有價證券並に現金を添へ、合計金壹千五百四十萬圓餘の財を公共に